



始初受

+



清實監紀行卷第六

目錄

鮑女宗 列女傳

蔡人妻 同上

李德武妻 音天列女傳

魏崇探題妻 女節花

洛陽青士妻

云名氏婦 古今集

大和國婦 同上

下野國婦 大和物語

附 古田院光妻 撰集抄



六和國婦 同五

きい小婦 硃石集

云名氏婦 同上

常陸國婦 同上

比賣鑑紀行卷第六

紀行第六

此是より下(貞女列女の如く)更とあるとすかゝら

小室明備の夫婦の別乃るをそとて入るわふふす

魚り事おひさあるはひひの類よまてびくひく

ほつ縁より

いみ(絶女宗)といひくらの宗の絶縁が妻なりそのまゝとめに

いゝしてよくつゝ入り絶縁はかく衛のまよわばく入

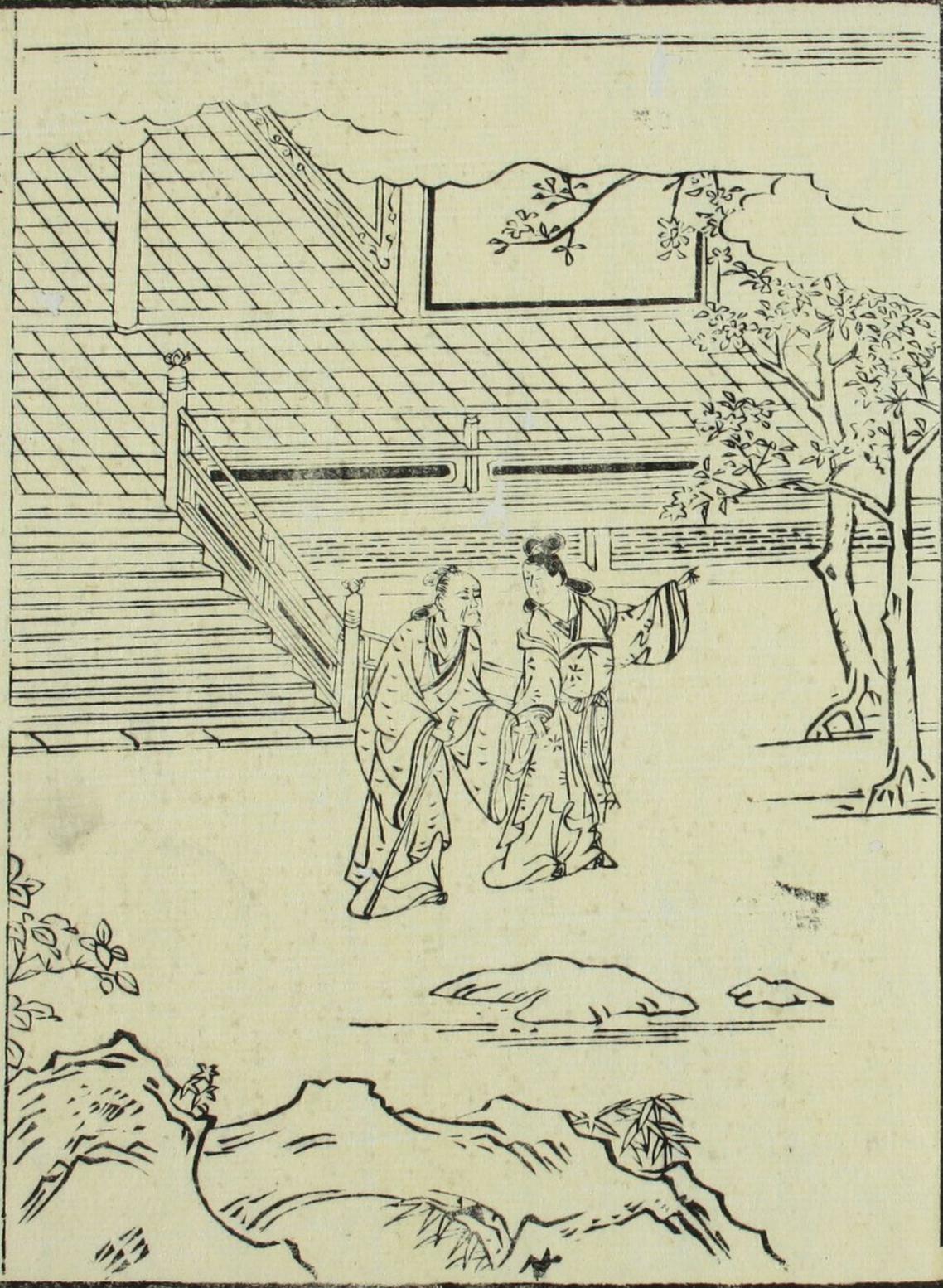
すでよとせうをりたればそいふも妻ととりてすゝむり

女宗いゝうじつも縁をげたりもあくまゝとすゝむり

若一けらるるにいつてもわうあてゆきこのたたりよの艶うつくしは  
 おこつまうの妻もも物ものかろりておこけあさうらびうた  
 その大いありしもの女おんなぶとまはしてやうけりひる人の  
 ちくちくひるひるにうたかへしうらりふおごさうたれ  
 こころいづく女おんないひのらりうとまおとても又また結むすらる  
 けだぐ夜よ念ねんとまいてまよはけ入いり男おとこ姑ぢと御ごおろそ  
 けいもひるひるにうたかへしうらりふおごさうたれ  
 おころの妻つまやかりしものうらりうとまおとても又また結むすらる  
 おここれ女おんなとまいてまよはけ入いり男おとこ姑ぢと御ごおろそ  
 二人ふたりなりうらりうたかへしうらりふおごさうたれ

人よすておろそけりしものうらりうとまおとても又また結むすらる  
 おここれ女おんなとまいてまよはけ入いり男おとこ姑ぢと御ごおろそ  
 二人ふたりなりうらりうたかへしうらりふおごさうたれ  
 おここれ女おんなとまいてまよはけ入いり男おとこ姑ぢと御ごおろそ  
 二人ふたりなりうらりうたかへしうらりふおごさうたれ  
 おここれ女おんなとまいてまよはけ入いり男おとこ姑ぢと御ごおろそ  
 二人ふたりなりうらりうたかへしうらりふおごさうたれ  
 おここれ女おんなとまいてまよはけ入いり男おとこ姑ぢと御ごおろそ  
 二人ふたりなりうらりうたかへしうらりふおごさうたれ  
 おここれ女おんなとまいてまよはけ入いり男おとこ姑ぢと御ごおろそ  
 二人ふたりなりうらりうたかへしうらりふおごさうたれ

こあひいりて我よははしくまふさくくを祓はるるの  
 うれいこころり女<sup>め</sup>のうらやましくあはしくりこころの  
 せよものか<sup>か</sup>の貞<sup>まこと</sup>よんよまのうらやまのうらやまの  
 かめこするあなうらやまのうらやまのうらやまの  
 いあ<sup>い</sup>のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの  
 あ<sup>あ</sup>のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの  
 く<sup>く</sup>のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの  
 と<sup>と</sup>のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの  
 む<sup>む</sup>のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの  
 う<sup>う</sup>のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの



おのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり  
かみのおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり  
おのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり  
おのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり  
おのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり  
おのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり

唐の李徳武が妻の<sup>あはれ</sup>裴氏に安邑の<sup>かみ</sup>守りあらせしめり  
字は<sup>あはれ</sup>漢美とすけり。おもはれける。おもはれける。おもはれける。  
えあり。徳武よしけり。おもはれける。おもはれける。おもはれける。  
しごつて。おもはれける。おもはれける。おもはれける。おもはれける。  
おもはれける。おもはれける。おもはれける。おもはれける。おもはれける。

おのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり  
おのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり  
おのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり  
おのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり  
おのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり  
おのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり  
おのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり  
おのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり  
おのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけりおのすけり





一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

其の一日は午後五時より八時までは  
 午後八時より十一時までは  
 午後十一時より翌朝の五時までは  
 午前六時より九時までは  
 午前九時より十二時までは  
 午後一時より四時までは  
 午後四時より七時までは  
 午後七時より十時までは  
 午後十時より翌朝の五時までは

人の暮らす所にはその地帯に  
 およびその地帯にその地帯に  
 合ふるべきことありしに  
 其の地帯にその地帯に  
 其の地帯にその地帯に  
 其の地帯にその地帯に  
 其の地帯にその地帯に

其の地帯にその地帯に  
 其の地帯にその地帯に  
 其の地帯にその地帯に  
 其の地帯にその地帯に







我亦嘗聞之矣  
 其言曰夫君子之於民也  
 猶天之於地也  
 地無天則不生  
 民無君則不立  
 故君子必先慎乎德  
 有德此有人  
 有人此有土  
 有土此有財  
 有財此有用  
 夫財者君子之所寶也  
 而小人所爭也  
 小人所爭者  
 利也  
 利之所至  
 民亦至焉  
 利之所去  
 民亦去焉  
 是故君子居則貴  
 而用則下  
 居則貴者  
 以其德也  
 用則下者  
 以其財也  
 財者君子之所寶也  
 小人所爭也  
 小人所爭者  
 利也  
 利之所至  
 民亦至焉  
 利之所去  
 民亦去焉  
 是故君子居則貴  
 而用則下  
 居則貴者  
 以其德也  
 用則下者  
 以其財也

君子居則貴  
 而用則下  
 居則貴者  
 以其德也  
 用則下者  
 以其財也  
 財者君子之所寶也  
 小人所爭也  
 小人所爭者  
 利也  
 利之所至  
 民亦至焉  
 利之所去  
 民亦去焉  
 是故君子居則貴  
 而用則下  
 居則貴者  
 以其德也  
 用則下者  
 以其財也



とていふのやうにきりきりせしむる事なればとていふは  
あつたにきりきりせしむる事なればとていふは

ひらきわたりのあつたにきりきりせしむる事なればとていふは  
あつたにきりきりせしむる事なればとていふは  
あつたにきりきりせしむる事なればとていふは  
あつたにきりきりせしむる事なればとていふは  
あつたにきりきりせしむる事なればとていふは  
あつたにきりきりせしむる事なればとていふは

あつたにきりきりせしむる事なればとていふは  
あつたにきりきりせしむる事なればとていふは  
あつたにきりきりせしむる事なればとていふは  
あつたにきりきりせしむる事なればとていふは  
あつたにきりきりせしむる事なればとていふは  
あつたにきりきりせしむる事なればとていふは

比賣階紀の巻第六

比賣鑑紀行卷第七

目錄

宋伯姬

列女傳

附楚貞姜

同上

息君夫人

同上

秋潔婦

同上

趙元楷妻

隋書

唐貴梅

國範圍集

京師節女

列女傳

周迪妻

古今列女傳

附李仲義妻

國範圍集

泉忠衛妻

山名禪室の妻

細川忠興の妻

源渡の妻

盛衰記

仁田忠常の妻

東鑑

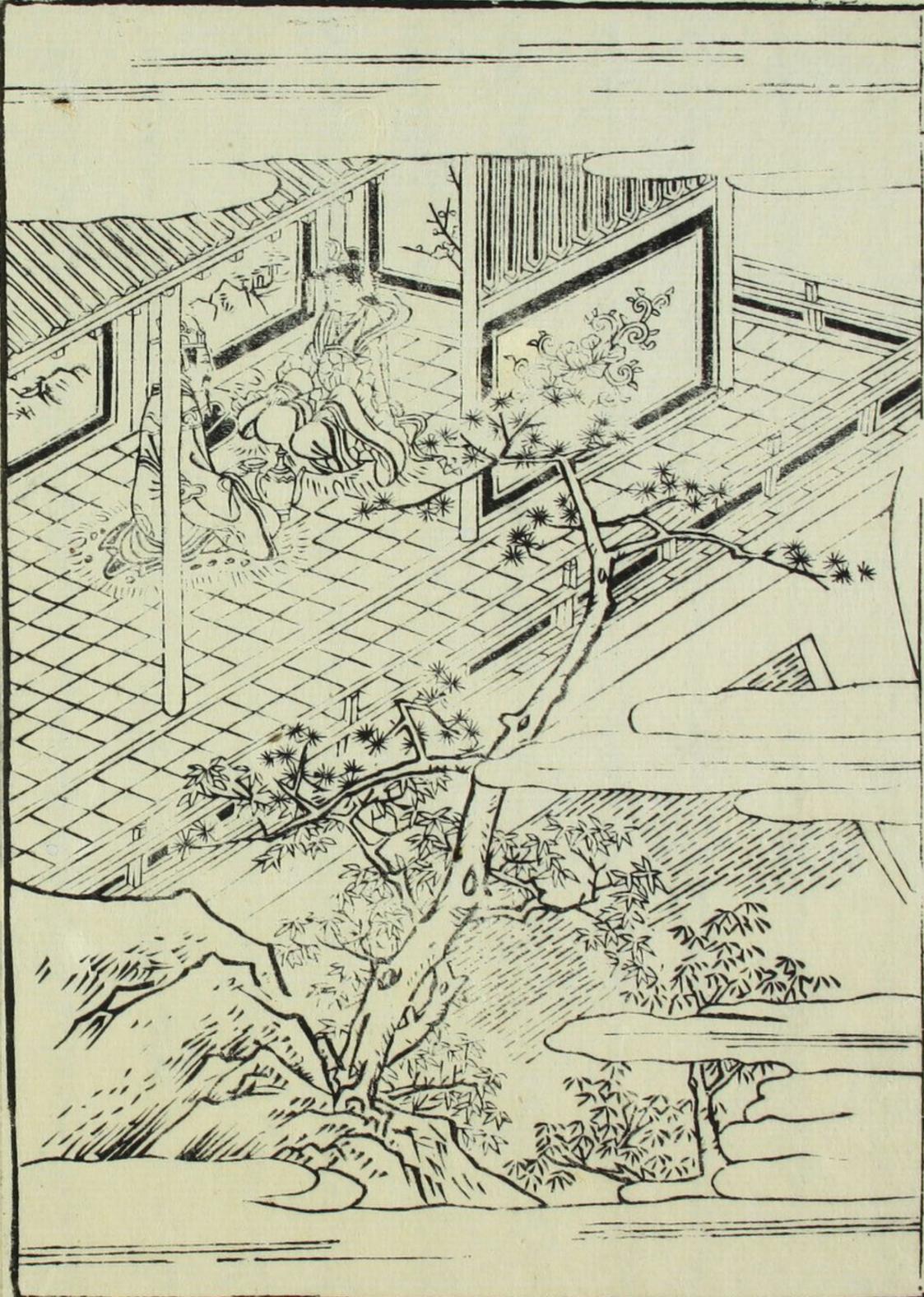
比賣鑑紀行卷第七

紀行才七 比賣の身六の事此中の一なり

いふ一泉の恭云の夫人伯姫と申せし魯の宣云れいと  
めなり。泉よとてりてす。そのうち恭云とせむひをれど  
めありありの流ひまのありあかき中より夫もくちく  
やけり。そのうち人々もくちく。そのうち人々もくちく  
まてぬ人のれ。そのうち人々もくちく。そのうち人々もくちく  
か。そのうち人々もくちく。そのうち人々もくちく。そのうち人々もくちく  
て。そのうち人々もくちく。そのうち人々もくちく。そのうち人々もくちく  
か。そのうち人々もくちく。そのうち人々もくちく。そのうち人々もくちく

おまほりするゆへに孔子を法と作りあつる中よ大女の  
 ためよる伯姫のものをとりてのせむくむり母よあつてを  
 らひらり又楚の貞姜とす毎侯のじとら姫は夫人  
 たりありと此姫をおつてびのり又夫人の沈の産よぬ  
 まつりあふふよにみちびあつてつりてやめて姫夫人  
 どうゆゑして夫人とじいさくれりよるあつてさつてさ  
 一の翁とよとれり夫人のいこ王をおつてはよ夫人と  
 めとるあつてらあつて翁とほつてさつてこのあつて死  
 らるゝさつて一は役の人あつてやいさつりさつてさつて  
 のりておくれなるとすつて夫人とすつて我とつり貞

女は物とたぐふと勇者の死とおもふと物とすつてけり  
 一りこにさつてつりて死あつてさつて役者らつてさつて翁  
 とつりよるあつてつりてつりてつりて夫人のあつて  
 うやあひらり姫をおつてつりてつりてつりてつりてつりて  
 一貞姜とよとつてつりてつりて伯姫のれとつりてつりてつりて  
 貞姜の位とつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりて  
 一礼義貞位のせつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりて  
 つりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりて  
 つりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりて  
 つりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりて



おなりとしらふらひわらふてほつてのなまきり

いあへ息君のまへにその姓しらふに花もれ息のあやち

ぶりてそのおきまもてわらひわらひとまもたてしてま

くおきまもてわらひわらひとまもたてしてま

わらひわらひとまもたてしてま

わらひわらひとまもたてしてま

わらひわらひとまもたてしてま

わらひわらひとまもたてしてま

わらひわらひとまもたてしてま

美はしむるものありて、はるかにあはれをなするに  
しむる日、このおとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
いふは、このおとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
いふは、このおとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
いふは、このおとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
いふは、このおとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
いふは、このおとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
いふは、このおとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
いふは、このおとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
いふは、このおとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
いふは、このおとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ

金くさりのふみ、自あつた家は、もて陳のよも、やばい入  
しめ、年ありて、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
て、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
おとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
おとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
おとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
おとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
おとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
おとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
おとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
おとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ  
おとこ、おとこ、おとこ、おとこ、おとこ



ついでに其の唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、

唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、

唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、  
唐の使者の言ふに、



一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

ち我あが死とうあひまあひびとありあつらるる者あ  
 ひぐあひくしてとどろひかゝらうくあくうりこころくす  
 ねよ三月すくあまざしうねいあまのりせあまらうか  
 いさぶかいららばはよと月あうかあうかあてあ  
 うらねのかんらんらやうああてあうさうさあ  
 ちくあ梅がんとぞあうらうはは揚外屋をいあ人の  
 こころいどあてあ梅が信とてああああああああ  
 頭のかいあああああああああああああああああ  
 とああああああああああああああああああああ  
 あああああああああああああああああああああ



そりすげまきみと又烈かりぬまきくるりあぢくは  
るん有司のちひせびーあぢくへうしん

淡々した素所の高女らいつら長安の終大昌里人

まかり氏にほりうらひの男こしにあり日ありきん

移くともそのあしあし書のふたなるあましん

時あのみちのあしあしあしあしあしあしあし

あまあしあしあしあしあしあしあしあしあし

白雲集

第七

美しきことなりとてはさしつかへなくも  
 ともかくもいふべき事なりとてはさしつかへなくも  
 ねたまひの事なりとてはさしつかへなくも  
 しるべき事なりとてはさしつかへなくも  
 うつらひの事なりとてはさしつかへなくも  
 ふたふたの事なりとてはさしつかへなくも  
 若者の事なりとてはさしつかへなくも  
 ちかちかの事なりとてはさしつかへなくも  
 この事なりとてはさしつかへなくも  
 ことごとくはさしつかへなくも

庵の時<sup>しん</sup>周<sup>しゅう</sup>油<sup>ゆ</sup>の事なりとてはさしつかへなくも  
 礼<sup>らい</sup>の事なりとてはさしつかへなくも  
 その肉<sup>にく</sup>の事なりとてはさしつかへなくも  
 くさくさの事なりとてはさしつかへなくも  
 もの事なりとてはさしつかへなくも  
 らの事なりとてはさしつかへなくも  
 ちかちかの事なりとてはさしつかへなくも  
 らの事なりとてはさしつかへなくも  
 らの事なりとてはさしつかへなくも  
 の事なりとてはさしつかへなくも

李(リ)洋(ヤウ)義(ギ)が書(カ)の劉(リウ)氏(シ)ありあてりてまゝててまゝてて  
どりくくあけつてあてりてあてりてあてりてあてりてあてりて  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は

乃(ノ)おの女(メ)すくはるる人(ト)を我(ガ)よりりて死(シ)にて女(メ)とあつたり  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
人の教(ノ)をたつてあつたり  
文(ガ)治(ヂ)乃(ノ)は奥(ウチ)列(リョウ)の泉(イハ)三(サン)帝(テイ)忠(チュウ)衛(エイ)が妻(メ)信(シン)文(ブン)店(テン)可(カ)え作(サ)が  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は  
ゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)はゆふ比(ヒ)は

下よ余ぢふふんきつれふまけたりつらよふ御一人  
 又が遠やうざんまますわりてふくごうじち城泉鏡けんぞうまたこも  
 口々んが奉濁ほうだくと下まづが御まうらてはもゆなせびん  
 ーとして大勢そのまかー泉鏡よけよはた御がらう  
 ぢふこれらうらうらうらうらうらうらう二千人の若わか流りゅうご  
 ちんうしてまふまふりた御書まひうしく我われのま  
 勢のたうひしておめんまうするまじいばうたわりも  
 まちくゆーのひきかきふとまのまふ今りの史書ししょ  
 らひのたうまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
 ぢふぢふぢふぢふぢふぢふぢふぢふぢふぢふぢふぢふぢふ

めとちうとしてらむもあめんともまうり二人のまは  
 ちうーしてまよつちうらうらうらうらうらうらうらう  
 らうりぢまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
 らうらうらうまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
 ばうらうらうまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
 右御まに二十一なわーらう  
 山名豊やまなひとよあ入道いりだう福ふくまは下したとま人のまその氏うぢのまはだあ  
 兵へい益えき絨じゆ敷しき十じゆ人にんおまひまはつりらうらうらうらう人ひと  
 福ふくまのまづらうまづらうらうらうらうらうらうらうらう  
 らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

臣鑑巻七

七(十三)

ざうけく〜  
 細川越中も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ

乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ

乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ

乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ  
 乃家も大坂より西へ

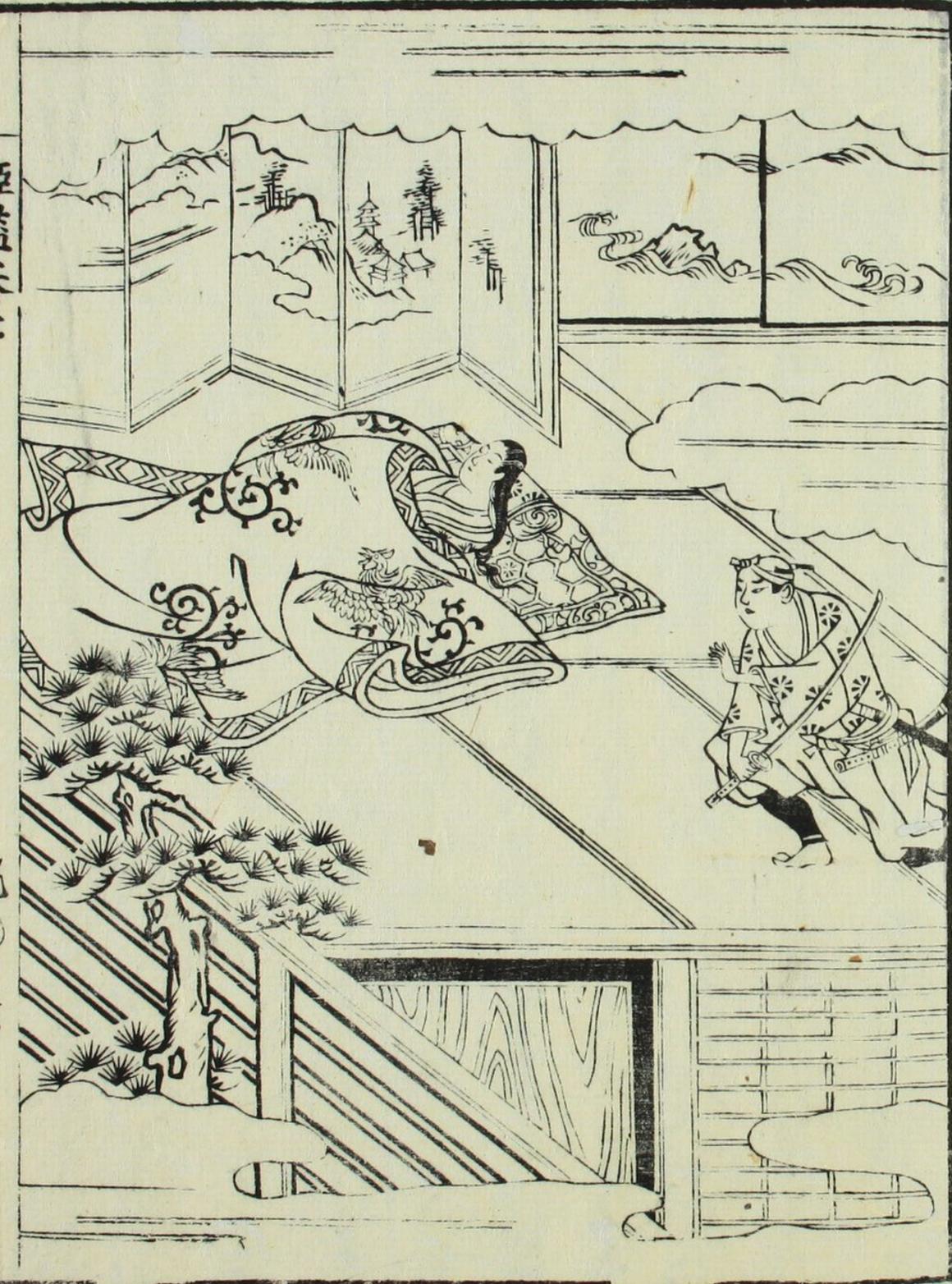
かどいりびあひりうまて恥辱<sup>ちじやく</sup>をかゝりて何とせん  
 ついでにうたがひなきうづ歌のうたふらふとて田をすて  
 よ自害<sup>じがい</sup>せしうづぶふ美奈河の鏡よたどうけく鏡よ  
 られちあびて後<sup>うしろ</sup>どころ扇のうたふらふ女房<sup>むすむ</sup>に人  
 りよふととり大の中ようく死なねども母の痛<sup>いた</sup>は  
 りよあまのぞれ痛<sup>いた</sup>あともおもひりはの世ぞてれうま  
 りいゝあくくた身の鏡うたふらふうりてく成<sup>な</sup>下<sup>げ</sup>の  
 さんたなわあふらふともてく人質<sup>にんしつ</sup>のうたわあ  
 ちかむせのくち田の田まのうたわあに常<sup>とこ</sup>あふ  
 してだうまの天のうたわあふらふその一死<sup>いつし</sup>乃<sup>な</sup>功<sup>こう</sup>とせよ

りらちうくくくあふらふうら<sup>うら</sup>のあまのり大<sup>たい</sup>烈<sup>れつ</sup>の人  
 まくらのうたの玉<sup>たま</sup>あふらふうたあまの若<sup>わか</sup>平<sup>へい</sup>屋<sup>や</sup>のうたのうたあ  
 らいびいなるうた  
 中<sup>なか</sup>ころはのむれ<sup>むれ</sup>後<sup>うしろ</sup>に常<sup>とこ</sup>よた<sup>た</sup>悲<sup>かな</sup>の射<sup>や</sup>後<sup>うしろ</sup>とらふりのあ  
 あとゆとらう女<sup>むすめ</sup>あひ母<sup>はは</sup>のあま衣<sup>ころも</sup>門<sup>かど</sup>とらふそのむらあ  
 とて<sup>け</sup>装<sup>ま</sup>束<sup>たば</sup>とらふ人<sup>ひと</sup>いよびうらそのうらうらあ  
 あまのむらあむらあむらあうらうらうらうらうらうら  
 うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 その目<sup>め</sup>れ<sup>れ</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>物<sup>もの</sup>うら<sup>うら</sup>接<sup>つ</sup>あ<sup>あ</sup>の中<sup>なか</sup>よ人<sup>ひと</sup>が<sup>が</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ん

臣(ナ)

絶(ナ)

ちほのそとへはながしやうたふるにやうやうのうたふり  
かきかゝるるのうたふりなるにやうやうのうたふり  
のうたふりなるにやうやうのうたふりなるにやうやう  
のうたふりなるにやうやうのうたふりなるにやうやう  
のうたふりなるにやうやうのうたふりなるにやうやう  
のうたふりなるにやうやうのうたふりなるにやうやう  
のうたふりなるにやうやうのうたふりなるにやうやう  
のうたふりなるにやうやうのうたふりなるにやうやう  
のうたふりなるにやうやうのうたふりなるにやうやう  
のうたふりなるにやうやうのうたふりなるにやうやう



如鐘卷七

七

Handwritten Japanese text in vertical columns on the right page. The script is a cursive style (sōsho). The text appears to be a list or a series of entries, possibly related to financial records as indicated by the header. Some characters are circled or have small marks above them.

Handwritten Japanese text in vertical columns on the left page. This page also features vertical columns of text in a cursive script. The entries are organized in a structured manner, consistent with the right page. There are some small annotations and markings throughout the text.

あかひのよはひをいふにやうなふりなすて  
とよむをいふにやうなふりなすて  
よをいふにやうなふりなすて  
をいふにやうなふりなすて  
をいふにやうなふりなすて

頼朝お世の時た田留帝た者  
おとて備会あふりなすて  
とあつて日いふにやうなふりなすて  
おあつて日いふにやうなふりなすて  
彼月あつて日いふにやうなふりなすて  
おあつて日いふにやうなふりなすて  
とあつて日いふにやうなふりなすて  
とあつて日いふにやうなふりなすて

此の書は...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

此實鑑紀行卷廿七

